

# 発電所だより 2024年3月号

安全対策工事の状況を  
ホームページで公開しています



東北電力株式会社女川原子力発電所総務部広報グループ  
女川町塚浜字前田1 電話0225-53-3111  
2024年3月発行

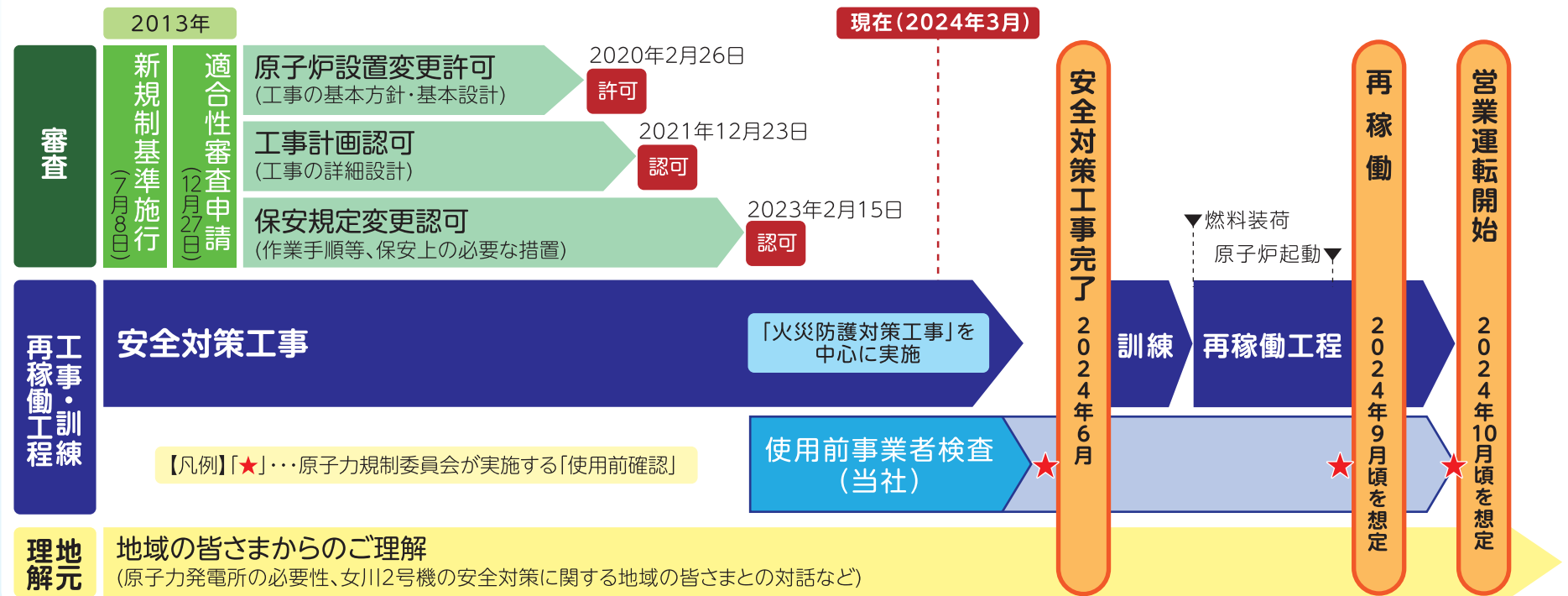
## 《女川原子力発電所2号機における安全対策工事完了時期の見直しについて》

女川原子力発電所2号機の安全対策工事完了時期について、現在実施している「火災防護対策工事」の工期を改めて精査した結果、これまでの2024年2月から2024年6月に見直しました。また、発電を開始する再稼働の時期については、2024年9月頃を想定しています。

当社といたしましては、引き続き、安全確保を最優先に、工事完了に向けて全力で取り組んでいくとともに、地域の皆さまからのご理解をいただきながら、再稼働を目指してまいります。

	《従来》	《変更後》
工事完了時期	2024年2月	→ 2024年6月
再稼働時期	2024年5月頃	→ 2024年9月頃
営業運転開始	2024年6月頃	→ 2024年10月頃

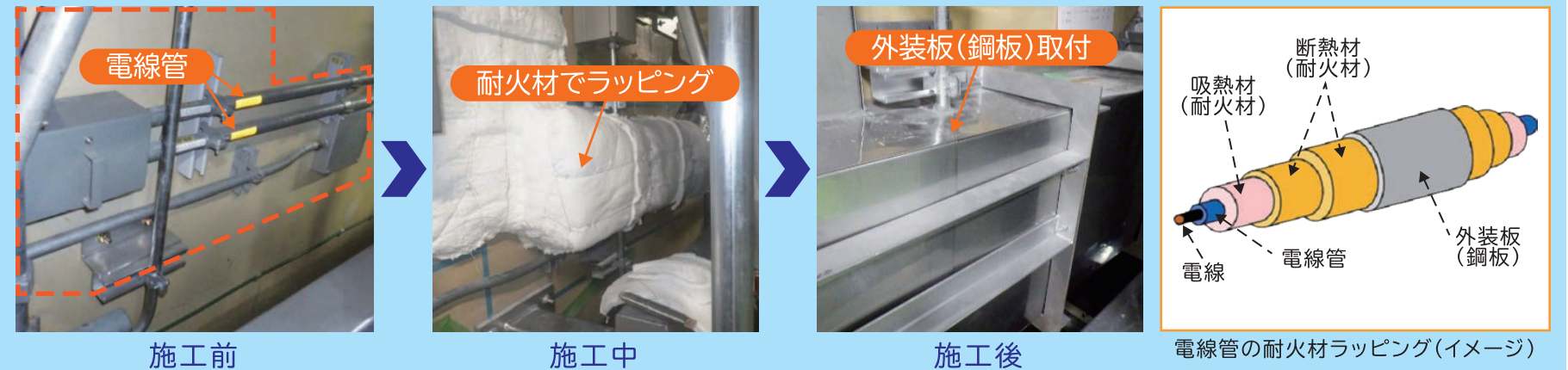
### 女川2号機の営業運転開始までのスケジュール(概要)



### 安全対策工事完了時期見直しの要因 となった火災防護対策工事の概要

▶ 発電所内で万一火災が発生した場合に、発生箇所と同一区画にある設備や電線管が損傷しないよう、断熱材などの耐火材で覆います。また、この工事により重量が増加することから、必要に応じて、サポート部材を追加するなどの耐震補強を行います。

### 現在実施している火災防護対策「電線管ラッピング工事」の一例



# 《女川原子力発電所2号機における使用済燃料乾式貯蔵施設の設置について》

当社は、2月27日、女川原子力発電所2号機における使用済燃料乾式貯蔵施設の設置について、宮城県ならびに女川町、石巻市に対し事前協議の申し入れを行いました。

女川原子力発電所2号機は2024年9月頃の再稼働を想定しており、これに伴い、女川原子力発電所2号機の使用済燃料プールが、再稼働から4年程度で貯蔵容量の上限に達することから、使用済燃料を女川原子力発電所から搬出するまでの間、発電所の敷地内で一時的に貯蔵する施設として、新たに「使用済燃料乾式貯蔵建屋」を2棟設置することとしたものです。

また、2月28日には、原子力規制委員会に対する「原子炉設置変更許可申請」を行っています。

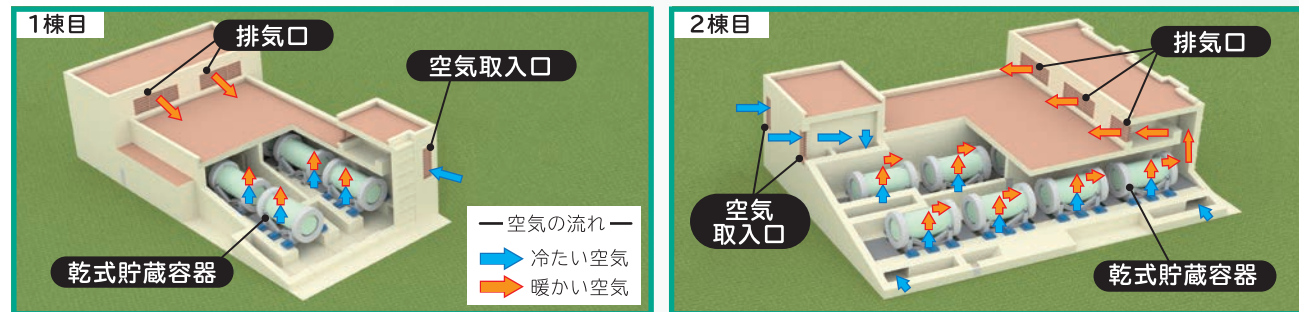
今後の原子力規制委員会の審査に適切に対応していくとともに、地域の皆さまからご理解をいただけるよう、分かりやすく丁寧な情報発信に努めてまいります。

## 使用済燃料乾式貯蔵施設の概要

使用済燃料乾式貯蔵施設は、「使用済燃料乾式貯蔵建屋」と「使用済燃料乾式貯蔵容器」で構成され、女川原子力発電所2号機の使用済燃料プールで十分に冷却された使用済燃料を、堅牢な金属製の乾式貯蔵容器に収納し、乾式貯蔵建屋で空気の自然対流により冷却する施設です。

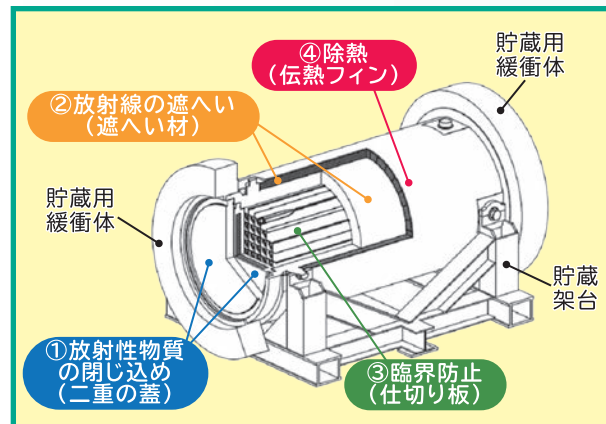
乾式貯蔵容器は、地震や竜巻などの自然災害で乾式貯蔵建屋に損傷が生じた場合においても、安全機能を維持できる設計としています。

### ■ 乾式貯蔵建屋(イメージ図)



	1棟目	2棟目
構造	鉄筋コンクリート構造 (約40m×約20m・高さ:約10m)	鉄筋コンクリート構造 (約40m×約30m・高さ:約10m)
設置場所	海拔38m	海拔36m
貯蔵容器	最大8基	最大12基
工事着工/運用開始	2026年5月/2028年3月	2030年8月/2032年6月

### ■ 乾式貯蔵容器(イメージ図)



▶ 乾式貯蔵容器は、「放射性物質の閉じ込め」「放射線の遮へい」「臨界防止」「除熱」の4つの安全機能を有する。

- ①放射性物質の閉じ込め 二重の蓋で密閉し、放射性物質の漏れを防止。
- ②放射線の遮へい 遮へい材により、使用済燃料から放出される放射線量を低減。
- ③臨界防止 仕切り板により、使用済燃料の間隔を保ち、臨界を防止。
- ④除熱 伝熱フィンにより、使用済燃料から発生する熱を容器表面に伝え、空気の自然対流により冷却。

乾式貯蔵容器の仕様(1基あたり)	
寸法	[全長]約5.4m [外径]約2.5m
重さ	約119t
収納体数	使用済燃料69体



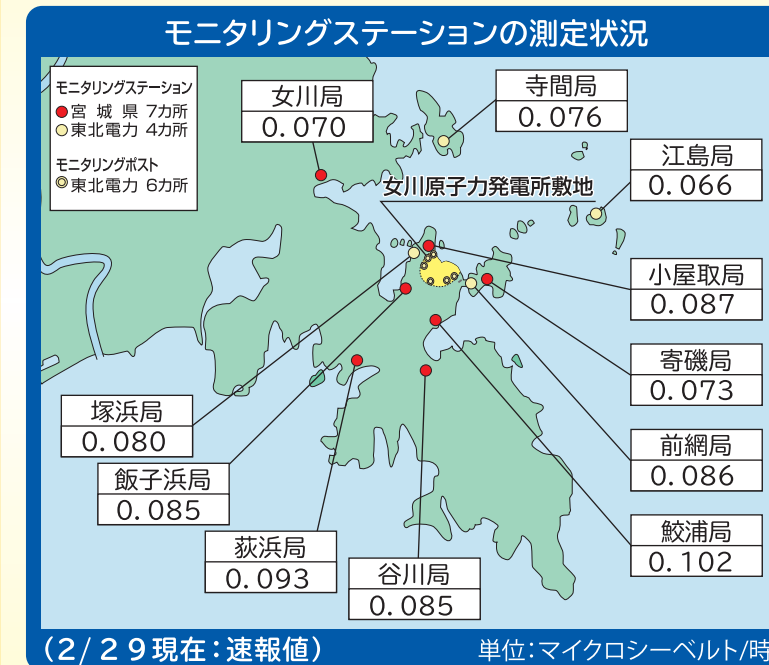
女川町への申し入れ(右、須田町長)

石巻市への申し入れ(左、齋藤市長)

## 《女川原子力発電所周辺の放射線量は安定しています》

女川原子力発電所周辺の放射線はモニタリングポスト<sup>※1</sup>やモニタリングステーション<sup>※2</sup>で測定・監視しており、その測定値は宮城県および当社ホームページで公開しています。

発電所敷地内に設置してあるモニタリングポストの2024年2月29日の測定値は、最大で0.046マイクロシーベルト/時程度で安定しており、健康に影響を与えるレベルではありません。



(参考)モニタリングポストの最小値と最大値 <sup>※3</sup>	
〈東北地方太平洋沖地震発生日〉	
2011年3月11日	0.027~0.064
〈地震発生後最大値〉	
2011年3月13日	1.8~21 <sup>※4</sup>
〈地震発生から2年と至近2年の(4/1)値および前月値〉	
2012年4月1日	0.063~0.098
2013年4月1日	0.055~0.076
2022年4月1日	0.033~0.045
2023年4月1日	0.034~0.046
2024年2月1日	0.033~0.046
2024年2月29日	0.032~0.046

単位:マイクロシーベルト/時

※1 モニタリングポストは発電所敷地周辺の環境放射線を測定しています。女川原子力発電所の敷地境界には6基のモニタリングポストが設置されています。  
 ※2 モニタリングステーションは環境放射線に加えて気象データを測定しています。  
 ※3 モニタリングポストの測定値は、宇宙線(宇宙空間を飛び交う高エネルギーの放射線)の影響分が含まれないため、モニタリングステーションの測定値より0.02~0.04マイクロシーベルト/時程度低い測定値となっています。  
 ※4 東京電力福島第一原子力発電所からの放射性物質の放出に伴い測定されたもので、測定された時間は約10分間です。

